

報告

学生参画で大学が変わる

— 産業社会学部学生参画型 FD 懇談会の取組 —

山 本 愛

要 旨

本報告は、産業社会学部 FD 委員会主催で 2011 年より行っている「FD 懇談会」の実践報告である。本学部の「FD 懇談会」は、学生、教職員が一堂に会して意見交流を行う「学生参画型 FD 懇談会」である。本報告を通して、「学生と話す」ことの意義、大学教育改善へのその効果を明らかにしたい。また、「教員：学生：職員」＝「教える人：教えられる人：事務手続きをする人」という従来の枠組みを超えた新たな関係性、それぞれの新たな役割に言及しながら、FD 懇談会を通して確信した、教育現場の当事者同士の共同作業がもたらす新たな大学創りへの展望を述べる。

キーワード

学生参画型 FD 懇談会、ピア・サポート、FD (Faculty Development)、SD (Staff Development)、SD (Student development)、アクター、プロデューサー

はじめに

2013 年 7 月 2 日、普段は教職員しか利用することのない学部大会議室に、学生 18 名、教員 22 名、職員 8 名、合計 48 名の本学関係者が集まった。この日は、1 回生全員が履修する授業「基礎演習」について約 2 時間の意見交流が行われた。産業社会学部では、このような学生参画型 FD 懇談会を、2011 年度から現在までに計 4 回実施している。これまでの参加者からは、「先生、職員、学生とまったく立場の違う者同士が目的を同じくして集まり真剣に議論している光景は、これから学びを進めていく上で励みになると思った」（学生）、「明日の授業からも活かすことができるヒントと、今後の学部カリキュラムを考える上でも重要なヒントをもらえた」（教員）などという満足度の高い感想が多く寄せられ、運営側として手ごたえを感じていた。そんな中、2013 年 7 月 22 日、独立行政法人大学評価・学位授与機構の主催による「平成 25 年度大学評価フォーラム 学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割」の開催を知った。フォーラムの趣旨は、欧州から質保証分野における実務家などを招き、質保証における学生参画の歴史的背景、基本的考え方、その実施の実態を具体的に理解すること、さらに、わが国における学生参画による教育改善の試みの事例報告も交えながら、高等教育質保証の将来のあり方について議論を

深めることとされていた。このフォーラムに参加した筆者は、国内外の考え方や実践を知り、比較することで、この間の本学部での FD 懇談会の意義や位置づけ、その効果がより明確になるのではないかと考えた。実際、このフォーラムでの欧州のゲストによる基調講演から、学生参画を取り入れた大学改善の具体的な効果を理解することができた。また、事例交流の際に本学部の取組みを紹介したところ、FD サミット¹⁾に参加したことをきっかけに学生 FD 組織を立ち上げたり、学内教育改善委員会に学生委員を置くなど、すでに積極的に学生参画を取り入れている大学からより詳しい話を聞きたいという要望をいただいた。その際、本学部の取組みが先進的なものであり、積極的に対外に発信する価値があると感じた。

以上のことから、高等教育の発展に寄与すべき新しい学生参画のあり方と、その具体的実践の共有を目的とし、本学部の学生参画型 FD 懇談会の取組みにおける主要な特徴や成果をまとめここに報告するものである。

1. 「学生参画型 FD 懇談会」実施の動機、背景

本題に入る前に、産業社会学部の特徴（理念、規模、学生など）を簡単に紹介する。本学部は「現代化・総合化・共同化」を理念に、1965年に開設された。2013年度現在、入学定員約900名、教員数約90名の大規模学部である。「積極的に社会に働きかけて社会問題を解決していく能力を育成すること」を人材育成目的とし、2007年度カリキュラムより1学科（現代社会学科）5専攻（現代社会専攻、メディア社会専攻、スポーツ社会専攻、子ども社会専攻、人間福祉専攻）を設けている。5つの専攻が共存することから学部生の興味関心は多様である。正課では学外の行政・NPO・地域社会などの多様な機関と関係を深め、主体的・能動的な学び＝アクティブ・ラーニングの実践に力を入れている。正課外においても、自分たちで学部イベントを企画・運営するなど、主体的で活発な活動を繰り返し続けている。

さて、この産業社会学部での「学生参画型 FD 懇談会」実施のきっかけとなったのは、2011年度前期五者懇談会であった。五者懇談会は、本学で1957年から現在に至るまで続く、学生の意見を反映したよりよい大学運営のための議論の場である。学部三役（学部長、学生主事、教学担当副学部長）、自治会代表、学友会が参加し、学生側が学部側に対し要求を挙げ、学部側はそれら要求課題を教学や学部運営に反映する。2011年前期五者懇談会で、学生側より「学生の声を授業やカリキュラムに反映させるためのしくみを確立してほしい」という要求が出された。具体的には、授業を担当する教員の裁量が大きいことで、学生・教員、教員同士、教員・学部、教学部の風通しが悪いことが指摘された。そして、学生と教員間の風通しをよくする方法の1つとして、授業懇談会（授業についての教員と学生の意見交換会、以下「学生参画型 FD 懇談会」という）の実施が学生側より提案された。本学には、インタラクティブシートという調査票を使用し、授業に関する学生の意見を反映するしくみがあるが、これは学期末のみ実施され、かつ間接的である。学生の要求は、直接的に授業について意見交換できる機会を設け、寄せられた意見が15回の授業の間に反映されるシステムにしてほしい、というものであった。これに対し学部側は、「教員の目線から見た良い授業が、必ずしも学生にとって良い授業であるとは限らない。学生目線の授業に対する意見が現実的に一番授業を良くする。」と応えている（2011前期五者懇談

会議事録)。そして2011年11月、数ある授業の中でも1回生時に学部生全員が必ず履修する学部のコア科目「基礎演習」を取り上げ、学部として初めて学生参画型FD懇談会「11年度基礎演習担当者会議」が実施されることとなった。第1回目について2012年12月に第2回目「12年度基礎演習FD懇談会」、2013年1月に第3回目「12年度プロジェクト・スタディ²⁾FD懇談会」、同年度7月に第4回目「13年度基礎演習FD懇談会」と、年度毎に1～2回のペースで開催している。なお、2回目以降名称を「FD懇談会」と改めたのは、これらが専任教員全員が担当する可能性を有する科目であることと、学生参画型FD懇談会は学生実態をリアルに把握する上で非常に有意義な機会であり、授業担当者であるなしに関わらず広く参加してもらいたい、と意図したためである。このように、学生の要求から、新しいかたちの学生・学部間意思疎通の場として、産業社会学部学生参画型FD懇談会が実現した。

2. 「13年度基礎演習FD懇談会」の概要

ここでは最近実施した「13年度基礎演習FD懇談会」（以下13FD懇）を例に挙げ、実際の学生参加型FD懇談会を紹介する。まず13FD懇の主な参加学生、当日の話題、懇談会実施までの流れを以下に示す。

<主な参加学生>

これまでのFD懇談会に参加した学生のほとんどが、学部教学に関わりを持った活動を行う組織に所属する学生たちである。彼らの組織名称、活動、役割を紹介する。

- ES (Educational Supporter) : 「基礎演習」の後期セメスター期間に入り1回生の学習援助を行う学生スタッフ(1クラスにつき1名のESが付く)。教員が希望する場合にのみ配置される。
- D-Plus : PC施設やデジタル機器管理業務を担う産業社会学部内の学生アルバイトスタッフ。産業社会学部棟のPCルームやデジタル機器の貸出室などを総じて「デジタル公房」と称していることから、スタッフ組織を「D-Plus」と呼んでいる。また最近ではD-Plus独自で本学部の学習支援を企画運営するなど活躍している。
- エンター : 「基礎演習」前期セメスター期間に入る学生スタッフ。1回生の学習・生活・自治の三側面のサポートを行う。学生自治会の内在組織として位置づけられており、全員で約100名程度の学生が所属し、1クラスにつき3～4人のチームに分かれて活動を行う。全クラスに配置される。

<13FD懇当日の話題³⁾>

【テーマ1】ESの役割って何？

【テーマ2】学生の「これを学んでおきたい！」から生まれたD-Plus主催企画「はじめてのレポート作成講座⁴⁾」

【テーマ3】「サブゼミ⁵⁾」って必要？—エンターとの意見交流】

<表> FD 懇談会実施までの流れ

日程	事柄	参加学生	参加教員	参加職員	合計
6/17 3 時間	第 1 回 予備懇談	ES 経験者 3 名 エンター 5 名 自治委員 1 名 (計 9 名)	学部教員 (FD 委員長・幹事長) (計 2 名)	学部職員 (FD 委員・学生担当) (計 3 名)	14 名
6/24 3 時間	第 2 回 予備懇談	ES 経験者 4 名 D-Plus3 名 (計 7 名)	学部教員 (FD 委員長・幹事長) (計 2 名)	学部職員 (FD 委員・学生担当) (計 2 名)	11 名
7/2 15:50 ～ 18:00	懇談会 当日	ES 経験者 4 名 D-Plus3 名 エンター 5 名 自治委員 3 名 文学部自治委員 2 名 学生 FD スタッフ 1 名 (計 18 名)	学部教員 20 名 教育開発推進機構教員 2 名 (計 22 名)	学部職員 5 名 教育開発支援課職員 2 名 学生オフィス職員 1 名 (計 8 名)	48 名

(1) 13FD 懇の特徴—参加者と予備懇談

①参加者

【参加学生】

13FD 懇に参加した主な学生は、前述した学生組織のメンバーであった。

【教職員—学部以外の学内関係者の参加】

<表>の参加教員、参加職員をみると、懇談会当日は学部以外の教職員が参加していることが分かるだろう。これは、懇談会で取り上げる話題について関連する学部以外の方にも参加してもらうことでより充実した情報共有および議論が期待できると考え、声かけしたためである。こうして学部以外の関係者に広く参加してもらったことは、13FD 懇が初めてのことであり、このことがまさに 13FD 懇の意義を深めた。

②予備懇談—13FD 懇の特徴

<表>のとおり、13FD 懇談会当日までに事前に 2 回の予備懇談を行った (6/17、6/24)。この事前の予備懇談が、的を得た議題の設定と、ほぼ初対面の参加者たちが懇談会当日限られた時間内で密度の濃い議論を展開するための鍵を握る。予備懇談の際に大事にしていることは、「学生が話しやすい雰囲気演出する」ことである。

五者懇談会も事前事務折衝を行うが、この場合学生が要求書を作成し、それを基に折衝を進める。また立場も、学生は要求する側、学部は回答する側、と明確に分けて行う。一方 FD 懇談会では、学生はその場に来て、教職員に訊かれたことや、普段の授業や学習支援活動等を通して感じていることをそのまま語ってもらう。要するに、学生と教職員で雑談するイメージである。学生たちは、教職員を前に始めは緊張気味でも、ここは自由に話していい場所であるという安心感を得ると、本音を語ってくれる。学生自身は単に思うことを話している程度の感覚かもしれないが、彼らの発言は授業や学部カリキュラムのどこが学生に伝わりにくいかを明快に指摘するなど、大学側への重要なフィードバックの役割を果たす。言葉を変えると「学生の本音が課題を顕在化

させる」ことである。その意味で予備懇談は、今議論すべき話題を掘り起こす重要なプロセスとなっている。

(2) 13FD 懇談内容

次に、予備懇談から懇談会当日にかけて交わされた議論を紹介する。テーマごとに議論のやりとりを紹介するのがわかりやすいと考え、そうしたかたちで記している。また、記載した発言内容は話し合い中のメモに即し発言者の趣旨を押えた上で再現しているもので、発言そのものを忠実に記すものではないことを予め断っておく。

【テーマ1：ESの役割って何？】

13FD 懇の開催にあたり、本学部 FD 委員で今回の懇談会をどうつくるか相談したところ、過年度の基礎演習をテーマとした懇談会ではエンターと意見交流したが、今回は ES として基礎演習に関わった経験のある学生にも話を聞いてみたいということになり、予備懇談を ES 経験者を交えて開始した。

①第1回予備懇談（6/17）より

●**教員1**：自己紹介の後、プレスト的に ES やエンターとしての経験と活動を通じて感じたこと、基礎演習やサブゼミで感じたことを自由に話してください。

●**学生1 (ES)**：ES は、正直入りにくい空気があった。1 回生とエンターの仲が良すぎて、1 回生にとって ES とエンターとのギャップが大きいと感じた。

●**学生2 (ES)**：ES になるときは、先生からとくにこうして、というリクエストはなくて、授業に行っただけでなんとなくできることをしていた。

●**学生3 (ES)**：自分は同じクラスに前期はエンター、後期は ES として入った。エンターの時と ES の時では、自分のクラスとの関わり方が違っていった。例えばサブゼミだと、エンターときは同じクラスに 3～4 人のチームとして入るのでみんなで協力して有意義な時間を作れるよう考えた。後期はサブゼミがうまく回っていないな、と思っても ES は一人だし、なんかできるかな、と考えながらも何をしたいかよく分からなかったので結局何もしなかった。

②第2回目予備懇談（6/24）より

●**学生3 (ES)**：ES は実は結構手持ち無沙汰なところがあった。基礎演習ではグループワーク中に「どう？ 順調？」と声をかけるぐらいで、役に立ってる感が薄かった。

●**職員1**：例えば ES 同士で意見交流できる場があればいいのかもしれない。今は担当の先生との関係だけで、ES 同士の横のつながりがゼロの状態。

●**教員1.2**：例えば、ES ルームみたいなものがあるって自由に出入りできる部屋があると、交流が生まれやすい。そういった環境が実は大事。

●**教員1**：ES も、担当クラス内だけではないサポートのあり方といった可能性があるかもしれない。例えば教員 1 人がスーパーバイザーについて下級生への支援を考えるととか。

●**教員2**：ES 活動自体を単位化し授業として研修をやるという考え方もある。

●**職員1**：例えば ES ルームがあって、自由に出入りして交流ができて、1 ヶ月に 2 回ぐらい担当の先生を入れたミーティングがあって、みんなの関わるクラスの報告し合いをしたりして、後

輩への学び企画をする、というのをやるとしたら負担に思う？それとも面白そう？

●ES たち：面白そう。

③懇談会当日（7/2）より

●教員 1：授業中以外に教員との打合せがありましたか？それと、それに対してどの程度前向きに（打合せを）やりたい、やっても構わないと感じているのか聞きたい。

●学生 1（ES）：授業時間外での打合せについて、私自身は前期エンターだったこともあり授業時間以外で打合せするのが普通と思っていた。1 回生に対しても先生に対しても、授業時間外でしゃべれる時間があったらしゃべってどういう授業運営をしたい、ということ話し合っていたし、授業時間内だけで解決しないといけないとは考えていなかった。

●学生 2（ES）：私も前期はエンター、後期は ES という流れだったので、むしろ授業外でいろいろ聞いてもらった方が授業内で分からなかったことを把握できると思っていた。

●教員 2：ややお互い（ES と教員）遠慮がちなところがあった。授業時間外でどこまで協力をお願いしていいのか分からないまま手探りで最後まで行ってしまったのが反省点だ。

●教員 3：1 点気になるのが、お金の問題。この点私は、非常に困った。ES は授業 1 コマにつきいくら、というふうにお金が発生する。その雇用関係にやりにくさがあると思うので、ES のしくみを検討するのであればお金の面も含めていただきたいと思う。

●司会教員：一応 ES は全学の研修を受けますよね。今日せっかく全学研修を担当する教育開発推進機構の方もおいでなので、予定していた話題ではないが全学研修についても聞いてみたい。

●学生 2（ES）：全学の研修では、ES の歴史やピア・サポートの中での位置づけをメインで話してもらったというのは覚えている。具体的にどういうことをするのかはあまり聞いた記憶はない。それと、ES の雇用制度の 2 つの区別について説明があった。授業内での活動と、授業外での活動の区別があり、支払われる方法が違うということだった。また産社では基本的に授業内の活動に限定されるという説明だった。

●学生 4（ES）：事務室主催の研修で、ES とは何か簡単に書かれたレジュメをいただいたのと、主としてお金の振り込み方を丁寧に説明していただいた。

●司会教員：教育開発推進機構の先生も来て下さっているのです、全学の研修でどういったことをしているのかを、教えて下さいますか。

●教員 4（教育開発推進機構）：全学で行う ES 研修では給料の話は 5 分ぐらいで、メインは本学における ES の歴史や役割の話をする。ES の役割として 3 つの機能の話をしている。1 つは受講生の学修支援、つまり学習内容の理解を助けるということ、2 つ目は教育改善や授業改善に位置するということで、ES の視点から教員にこういうやり方の方がいいですよ、というようなコメントをしてもらい、教員はそれを踏まえて授業を設計していく、ということ、3 つ目は ES 自身の成長、ということ説明する。

●司会教員：2 番目の「授業改善」が ES の役割として入っているのは初めて聞くことだった。もう少し情報共有が必要な、というふう思った。

以上が、ES についての主なやりとりであった。実は ES について本学部ではこの間それほど注目も状況把握もしていなかった。ところが予備懇談での学生たちの話から、ES に関する課題が浮彫りになった。例えば、1) ES 経験者が、エンターとの入替りの際にやりにくさを感じる

場合がある、2) ES としての役割を明確に理解していない状態で活動を行っている学生もいる、3) ES はエンターのような複数名のチーム体制でなく、教員と学生 1 対 1 の関係となっており、ES 同士で情報共有し合う機会がない、などである。一方で、ピア・サポートという視点での本制度の活かし方や可能性についても構想が膨らんだ。さらに、懇談会当日の議論を経て ES 雇用制度や学部と全学機関間の情報共有の欠如など、ES 制度をとりまく「壁」が顕在化し、各関係者全体でそれらを認識できたことがとりわけ大きな成果であったと言える。

【テーマ 2：学生の「これを学んでおきたい！」から生まれた D-Plus 企画「はじめてのレポート作成講座」】

13FD 懇の準備開始当初、D-Plus については全く参加者として想定されていなかったのだが、第 1 回目予備懇談で話題にあがり、彼らの活動が注目されることとなった。

①第 1 回予備懇談（6/17）より

●**学生 4（エンター）**：基礎演習を 3 回見てきた。1 回生の時は受講者として、2、3 回生はエンターとして授業に入り、それぞれのクラスでやるのが違うと感じた。各回生で経験した基礎演習のレジュメを見比べると、1 年目は先生の研究分野に特化した内容（環境系）、2 年目はパワーポイントやプレゼンの仕方を重視した内容、3 回目は、大学生になるとは、をテーマにタイムマネジメントやアカデミックな文章の書き方を徹底的にやる、という具合に全然違う。経験する基礎演習によって、1 回生の時点ですでに差がつくと思った。基礎演習担当者間で「これだけは守りましょう」というルールはあるのか？

●**教員 2**：基礎演習での「5 つの獲得目標」というのがある。それに沿って授業を進める、ということになっているが、そこから明らかに逸脱しているとすればそれは問題があると思う。ちなみに、今の基礎演習で 1 回生に書く力がついている、という効果は感じられる？

●**学生 4**：効果があると感じる。基礎演習の後サブゼミで「いまさっき教えてもらったことをやってみよう」という実践をさせると、1 回生はかなり落とし込んでいる感じだった。そこまでやるクラスと、やっていないクラスでは、やっぱりかなり差がつくと思った。

●**職員 1**：この話題に関わって、最近学生の間で行われている「はじめてのレポート作成講座」について紹介したい。D-Plus が企画した取組みで、1 回生対象にレポートの書き方を親切に教えている。受講生からは「レポートの書き方が不安だったので、とてもためになりました」などという感想が寄せられ、とても人気の講座だった。ある先生とこの講座の話をしていたとき、「自分のクラスはこういう『書くトレーニング』をしているけど、やっていないクラスがあるとすれば、差が付くのは当然。基礎演習のガイドラインに最低これは教える、といったものがないのは問題かもしれない」と話していた。

②第 2 回予備懇談（6/17）より

●**教員 1**：D-Plus から「はじめてのレポート作成講座」企画の経緯と内容紹介をお願いします。

●**学生 1（D-Plus）**：（経緯について）来年度入学してくる新入生向けの企画をしたいと話し出したのがきっかけ。自分たちが 1 回生の時に感じていた不安を出し合うと、一番問題に挙がったのが「レポート」だった。「レポートを書かなければいけないと言われるけど、どう書いていいのが分からない」という私たち 1 回生の声から、では来年度の新入生に向けて「Office 講座」を開

講しようという話になった。

(本番の様子) チラシを配布した当日から申込みに来てくれる人もいた。受講中終始メモを取りながら全員が真剣に耳を傾けてくれた。

(分析) なぜこれだけ多くの人に参加してくれたのかを分析すると、次のことが考えられる。

1) レポートについて教えてもらえる機会が乏しいこと、2) 対象と目的を明確に絞ったこと、3) 1 回生を対象に、「はじめてのレポート」と焦点を絞ったことで、何を学べるのかということが明確であったこと、4) すぐに実践できる技術であったこと、5) お昼休みの時間をつかった短時間の講座であったこと。

(やってみての感想) 企画を実施した D-Plus スタッフからは、次のような感想が挙がった。1) 今回の企画を機に自らもレポートの書き方を学ぶことが出来た、2) 教える立場になって初めて受講生が真剣に耳を傾けて聞いている姿をみてやりがいを感じ、同時に先生が一つの講義にどれだけの準備をされているかを知ることができた。

●**学生 2 (D-Plus)** : 大学生 = レポート、とか、小論文や感想とレポートは違う、と聞くけど、具体的に何が違うのかよく分からず、不安に思っていた。

●**教員 1.2** : 僕らも大学生の頃は同じように思ったのかな。大分前だから忘れてる (笑)。

●**学生 2 (D-Plus)** : 参加者の感想で印象的なのは「ヘッダー、フッターの使い方が分かった」というもの。情理テ⁶⁾ で 1 回は聞くはずのことを「はじめて知った」と言っていた。いろんな授業で何回か聞いていても、レポート作成で使えるものとして繋がっていない。

●**学生 3 (ES)** : 僕もレポートって何? と思っていた。いいレポートの書き方ってどうしたらいいのだろう、という疑問は今もある。こういうのを受講すれば困らないかもと思った。

●**学生 4 (ES)** : 1 回生の時分からなまま書いて、とりあえず書いたらなんか単位もらえたなーと思って、そのままの状態で行ってしまう子は結構いると思う。

●**教員 1** : この取組みは、とりあえず基本は踏まえてこう、というところがいい。「学びの転換」と言われるがなかなか上手く行っていない。そこへの対処が「基礎演習」のはずなのに。学校がすべきことを D-Plus がやってくれた、と言ってもいいぐらいのことを取組んでくれた。

③懇談会当日 (7/2) より

●**教員 5** : (「はじめてのレポート作成講座」が) 非常によくできていて感心している。現在カリキュラム改革議論をしているが、その中でも基礎演習は基幹科目なので大切だと考えている。学生実態が変わってきていて、我々の当たり前だと思っていたことが学生には通じないこともある。特にレポートの書き方・大学での学び方を「基礎演習」でしっかりやるべきという意見もたくさんある。この講座のマニュアルは良くできていて、分析もしっかりしている。レポート講座は学生のニーズにあった。学生の視点から「どこが分からないのか」を良く感じた人が作ったのだと思う。学生がこれだけできるのだから、当然教員もこれぐらいのことはやらなければならないと思う。

●**教員 6** : このまま授業で使いたい、と思うぐらいいいものだ。今の 1 回生が文章を書くことへの不安を抱えていること、どういうことを必要としているのかが今回よくわかった。教員としてはこういう風にレポートを書いて欲しいと思うことはあるが、その思いと実際のギャップを理解しなければならなかった。

●**学生 6 (エンター)**：3 回生でもレポートの書き方がわからない友達がいる。多くの人が「基礎演習」で学ばなかったらそのまま 3 回、4 回生になってしまう。エンターと D プラスが協力してサブゼミの時間で「はじめてのレポート講座」を実施することもできると思った。

このテーマは、基礎演習の授業内容の差が学生のアカデミックスキルの差に影響を及ぼしていることが学生から具体的に指摘されたことをきっかけに、浮かび上がった。そして「書く」ことへの不安を実感する学生である D-Plus が考案した「はじめてのレポート作成講座」が人気を博したことに、学部が大いに興味を持った。学生目線で作られた学びのサポートは、教員目線では発想されないものであり、衝撃を与えたとともにリアルな学生実態を示したからであろう。この講座が学生間で好評であった意味を学部が学生と議論する作業は、学生実態を的確に理解する上でこれまでにない程の貴重な出来事であったと筆者は考える。さらに学生 6 の発言にもあるように、こうした取組みをエンター（および ES）の活動として広げることでさらに学生同士の学びが拡充する可能性の発見も、このテーマから得た収穫であると考えている。

【テーマ 3：「サブゼミ」って必要？—エンターとの意見交流】

「エンター」は、前述のとおり前期「基礎演習」に入り 1 回生のサポートを行う集団である。本学では、全学部において「基礎演習」の次の時限に「サブゼミナール」（以下サブゼミ）と呼ばれる時間が置かれている。これは 1970 年代、学生が主体的に学ぶ時間の保証を学生（自身）が要求したことから制度化された時限である。従ってサブゼミ運営は基本的に学生主体で企画運営する時限とされ、前期はエンターが中心となり 1 回生とともに運営を行う。ただしこの時限は単位認定がされない、学生主体で運営する時間とされるため教員の関わり方が薄いなど様々な要因から、遊び偏重になる、運営自体が困難であるといった状況がある。「サブゼミ」については 2012 年度 FD 懇談会でも取り上げたが、当時の議論を経ての 13 年度のエンター活動の振り返りも含め、引き続き 13FD 懇で話し合うこととなった。また今回は、13FD 懇の 1 か月前に実施した教員への「エンターに関するアンケート」を基に話し合った。

①第 1 回予備懇談（6/17）より

●**学生 1 (エンター)**：エンター活動について僕らが反省しているのは、サブゼミに「必修」なるものをつくれればよかったな、ということ。例えば 1 回目の時間は「サブゼミとは何か」を説明する、2 回目は図書館ツアー、など。今回は各クラスエンターに任せすぎて上手くいかなかったというクラスもあった。それとサブゼミについて 12 年度の FD 懇談で「先生にもアドバイスを求める」ようにして改善していこう、という話をしたけれど、先生たちのアンケート回答をみるとやっぱり「サブゼミはエンターが決定してもらえばいい」という意見もあって、そんなふう考える先生もいるんだな、と戸惑うところがある。

●**教員 1**：短刀直入に聞くけど、サブゼミって必要だと思う？

●**学生 1 (エンター)**：学生が主体性を発揮する場、という意味で担保しておきたい、という思いはある。だけど、今のサブゼミのままでは問題があると思う。サブゼミが有意義に使えていないなら要らないのでは、と言われたら、そこは何もいえない。

●**職員 1**：実は、12 年度の基礎演習 FD 懇談会でも同じ問題について話をした。その話を受けて、「サブゼミ運営モデル」を作成した。これには、サブゼミが学生任せでは立ち行かなくなっている

ることを踏まえた上で、教員もサブゼミ運営に「アドバイスする」ことや「専攻企画の実施」など具体的に取組めることを書いて、13年度の基礎演習担当者会議で配った。ここまでが、昨年度改善策として動いたこと。

●**教員 1**：「サブゼミ運営モデル」にはほぼ集約されたことをどれだけ浸透させるかが課題。

②懇談会当日（7/2）より

●**司会教員**：サブゼミの開講責任は学部にあるというのを頭においてもらって話を進めたい。エンターたちは、自分達に責任があるという重荷を抱えていて、それは過剰な背負い方だと思う。教学責任を誰が負うのかは忘れてはいけないということを頭に入れて考えてもらいたい。

●**教員 1**：私はエンターとの顔合わせを13回やった。毎週1時間半実施して次の週のサブゼミの相談をしている。サブゼミも毎回10分間は出席し、そろそろ退出してもいかなというときに退席する。エンターが、「去年の俺達はこんなこと（ゼミ、授業内容を考えるなど）してなかった。このことで一番成長しているのは自分たちだ」と話していた。そうして彼らが育っていることを嬉しく思う。15回は色々考えると手間はかかり大変だけどやりがいがある。

●**教員 2**：僕は真逆で、エンターに任せており、安心しきっているところもある。もちろん何か困ったことがあるときには連絡してもらっているが。サブゼミはあくまで自習で、基本的には教員がいないのが前提だと思っている。教員がいない授業をどうつくれるかというのも大事。

●**学生 1（エンター）**：クラスの中でもニーズがばらばらで、学びを求める学生と、遊びを求める学生がいて毎回企画に苦労する。例えば、社会学に興味を持ってもらいたいと考え、かっちり勉強する基礎演習とは違い、サブゼミは楽しみながら考えられる企画を立てた。以学館の周辺を散策し、普段当たり前と思っていることを写真に撮り、なぜそう思ったかを話し合った。そんなふう「楽しんで学ぶ」企画をする努力をしても全員出席はしていない。「学び」と「遊び」のバランスが重要だけど、なかなか難しい。

●**司会教員**：「難しい」という言葉がほそっと出たが、本質を突いている言葉だと思う。

●**職員 1**：今学生さんが話したことでいうと、学生たちは学びのきっかけをつくるアイデアを持っているが、最終的にどう落とし込むかを自分たちだけで考えることは難しい。そこで教員に意見を聞くなどして教員を巻き込めばヒントをくれるのではと思うが、学生はどういう風に先生に相談したらいいかと思いつかず、結局自分たちでやりきって中途半端になる。

●**司会教員**：この2年間FD幹事として関わってきた中でエンターの活動に関して言うと、ピア・サポートというかたちをとった総合的な学生支援のあり方を考えなければならないと思う。この学部に来ている学生の特性、この年代、この発達段階に、どういう支援が可能なのか、ということをこういう会議で少しずつ蓄積していきながら考えていきたい。

サブゼミに関する問題は誰もが認識しているが、具体的かつ効果的な打開策が見えないのが現状である。それでもその時の学生と丁寧な議論を重ねることで大学としてどういった関わり方が今適切かを検討し続けることが重要であり、それが学部の責任であると筆者は考えている。

(3) 13FD 懇を振り返って

13FD 懇では、学部教職員、学部外関係者、学生にとって、各々の立場での課題発見があったと考える。以下、筆者としての気づきをまとめてみる。

①ピア・サポートという学生支援の可能性

今回、「ES」「D-Plus」「エンター」という3つの学生組織、活動を深く理解することができた。彼らに共通するのは、「学生はやる気がある」「充実した時間を送りたい欲求がある」ということである。それと同時に、彼らの意欲が必ずしも発揮されていないケースや、どう発揮すればよいかを学生の自主性のみで考えるには限界があることが分かった。これは、学生の能力が足りない、という意味でなく、教職員が彼らの活動に教育的に関わることでより学生の力を引き出す可能性が見えた、という意味である。司会教員のまとめにある、「ピアサポートというかたちをとった総合的な学生支援のあり方」に大学として取り組む意義を認識した。

②教員の当たり前＝学生の当たり前ではない。伝わる教育とはそのギャップを理解すること。

例えば「レポートとは何か」「研究とは何か」など、教員が当たり前のように理解しわざわざ言語化しないことが学生には伝わらないままという状態が蔓延している。学生の本音から教員と学生間の理解のギャップを知ることが、今必要な教育を考える有効なヒントとなる。

③学生参画型FD懇談会のFD、SD、SDという側面

・「FD」(= Faculty Development)の側面。13FD懇はFD委員長のこの言葉で締めくくられた。「皆さんの意見をしっかりと受け止め、今後の導入期教育をどう改革していくのかという議論の中で具体的な案として活かしていく。一部には次年度または明日にでも活かせるものがあった。一方で、皆さんの後輩が恩恵を受けるといったかたちで反映されるものもあると思う。こうした長期的視点においても、今回みなさんに協力いただいたことに感謝したい。」この発言から、懇談会をとおして教員が長期的・短期的にFaculty Developmentへ活かすことができる手がかりを得ていることが分かる。

・「SD」(= Staff Development)の側面。【テーマ1】のES課題で話題になったES雇用制度や、学内のピア・サポート組織に関する情報管理や統括については職員を中心に行っている。職員についても見直すべき制度や課題発見に繋がる側面があることから、SD(Staff Development)の役割も果たしていると言える。

・「SD」(= Student Development)の側面。【テーマ2】でのやりとりから、学生同士が互いの活動を知り合うことが刺激となり、自身の活動の振り返りやアイデアに繋がることがみえた。また、13FD懇に参加した学生からは、「先生方がこれほど学生の活動について考え、助言してくれたことに果たして自分たちは応えきれているのか考えさせられた。産社をよりよくする上でも自分たちの活動の根本を見直し、今後活かしたいと思った」という感想が寄せられた。教員が自分たちの活動について真剣に考えていることを知ること自体が学生にとって大きな励ましとなり、彼らの今後の活動への意欲に繋がるのだと感じる。懇談会后、参加した学生から、今度は自分たちが考えるテーマで懇談会をしたい、こういう話もしてみたい、などという要望を伝えてくるようになった。学生たちはFD懇談会を通して、自分たちが議論に参加することの手ごたえや意義を感じ取っている。学生参加型FD懇談会は、学生の「大学を創る当事者」としての存在に、教職員だけでなく、学生自身が気づき、認める場となっている。

ゆえに「FD懇談会」と名称づけているこの学生参画型FD懇談会は、実際にはFaculty Developmentのみならず、Staff Development、Student Developmentにおいても有効であると、筆者は考えるに至っている。

3. 見えてきた今後の課題

次に FD 懇談会の実施によって見えてきた課題を挙げておきたい。

(1) より多くの学生や教員にこの取組みを知らせる工夫が必要であるということ。

この間行った懇談会への参加者は、学生はほぼ全員が学部教学と関わる学生組織に所属する学生である。FD 懇談会に関心がある学生には誰でも積極的に参加してもらえればという意図から、掲示やウェブ配信などで懇談会の告知、広報を実施したが、今のところその知らせを見て参加を希望してきた学生はいない。一般の学生にはこういった取組みについてほぼ認知されていないだろう。また、教員についても、参加する教員メンバーはほぼ毎回同じである。いろんな教員に学生との議論を経験していただきたいのだが、なかなか足を運んでもらうのは難しいと感じている。懇談会内容やその成果を報告、発信することで、少しずつ関心を広げていくことが必要だと認識している。

(2) 懇談会で浮かび上がった課題を学生に着実に返していくこと。

懇談会でいくら「気づき」があっても、大学がそれに対して全く動かなければ、逆に学生の信頼を失うことになる。すぐにでも改善できる課題と長期的なものとの区別し、できるところから着実に改善していく努力が必要である。懇談会に参加した学生が、「自分たちの声が届いた」と感じるができるのが、最も良い。そうすることで、彼らが声をあげ、組織の動きに参加することの意義を体感でき、ひいては主体的に社会と関わる人間を育成する＝学生の民主性を育てることに繋がると考えている。

(3) 学生、教職員が常に入れ替わること。

学生組織のメンバー構成は、1年ごとにほぼ入れ替わる。また、本学部 FD 委員会の教員の任期は1年、職員にも異動があるといったふうに、人の入れ替わりが常に発生する。今現在よい懇談会ができていても、メンバーが変わればそのかたちも変化する。こういった状況でいかに継続して議論する機会を持ち、いかに経験と知恵を蓄積していくのか、が常に向き合わなければならない課題である。

(4) 産業社会学部での今後の課題と展望

産業社会学部は、カリキュラム改革を2016年度に見据え、現在ワーキングを立ち上げ検討を進めている。これまでの FD 懇談会で明らかになった課題を次期カリキュラムや授業運営に具体的に反映させることが、学部課された課題であり使命であろう。また、FD 懇談会の経験を生かし、改革の検討過程で学生との意見交換の場を持つことで、学生の参画を得た学部改革を展開できる可能性があると考えている。

4. おわりに—学生、教員、職員の役割とその関係性

冒頭に紹介した大学評価フォーラムで欧州の学生参画の考え方を学んだ。欧州では、教員が <teaching (教える) の専門家> であるならば、学生は <learning (学び) の専門家> として、質保証のプロセスへの学生参画を積極的に取り入れている。ここまで紹介してきた懇談会の経験から、わたしは日本の学生においても、単なる「教えられる人」に留まらない役割を見いだして

いる。

例えば教育現場を「舞台」に見立てると、これまでの学生と教員の関係は、教員はその舞台をつくるアクター、学生は観客であると言える。一方、このFD懇談会から見えてきたのは、学生と教員はともにアクターである、ということだ。よりより舞台(=大学)を創るために、互いの立場から異なる視点で議論を交わすからこそ、今のリアルな課題に目を向け、必要な改善策に近づくことができる。なぜなら、教育に関する学生の視点は教員の意見を補完し、また学生はエネルギーや情熱、創造性をもたらすからだ。学生は、単に舞台を観る「お客さん」でなく、舞台をつくる「アクター(=当事者)」なのだ。

では、筆者自身の立場である大学職員の役割は何であろうか。わたしはそれを、舞台で言う「演出家」または「プロデューサー」であると考えている。学生というアクター、教員というアクター、それぞれの特性を把握し、役割を引き出す。そして例えばアクター同士を繋ぎ、FD懇談会のような議論の場を設定することが、よりよい舞台を創るためのプロデュースなのである。

「教員：学生：職員」＝「教える人：教えられる人：事務手続きをする人」、という一般的に理解されているであろう関係性を超え、「アクター<teachingの専門家>：アクター<learningの専門家>：プロデューサー」という関係性をもった教育現場の当事者たちが大学を創造する。この共同作業が今後の日本の高等教育改善および質保証に新たな展開を生み出すことを、FD懇談会を経て確信している。

注

- 1) 2009年から立命館で始まった学生FDの全国イベント。毎年参加者は増え、13年度は全国の大学から過去最高の約450名の学生・教職員が参加した。各大学における取組みの紹介や意見交換を通じ、より良い大学のあり方を考える。
- 2) 産業社会学部2回生全員が履修する、定員20名程度の小集団科目。
- 3) 本報告内容が分かりやすいよう話題を表示したものであり、実際の懇談会では以下のとおりの議題で表示された。
 - 【1】ESの役割について(12年度ES体験談から今後のESのあり方について意見交流)
 - 【2】基礎演習で身につけておきたいアカデミックスキルについて
(D-Plusスタッフより「はじめてのレポート作成講座」について話題提供、その後意見交流)
 - 【3】クラスエンターアンケートを受けて
(6月に実施した「クラスエンターアンケート」を受けてエンター団と意見交流)
- 4) この講座は新入生を対象とし、中間レポート前(レポート課題が出される5月下旬～6月上旬頃)の昼休みの時間に行われた。講座は「レポートの考え方編」と「レポートの書式設定編」の二部構成のマニュアルを基に、「レポートの考え方編」ではレポートの参考文献の引き方やテーマ設定、アウトラインの構成方法など主に説明し、「レポートの書式設定編」ではWordでレポートの体裁を整える技術を実際にPCを使って受講生に実践してもらったかたちで実施された。以学館(学部棟)内のPCラウンジにある定員6名の小部屋で行われ、実施回数は当初6日を予定されていたが、好評でキャンセル待ちが多数発生したため、2日間追加で実施した程の盛況ぶりであった。
- 5) 2. 「13年度基礎演習FD懇談会」の概要(2)13FD懇談会内容【テーマ3:「サブゼミ」って必要?—エンターとの意見交流】参照。
- 6) 産業社会学部1回生全員が履修する科目「情報リテラシー」を指す。本学部での4年間の学びに必要な

なパソコンの利用法（Windows の操作、ワープロ、表計算）と情報ネットワーク（e-mail、インターネット WWW）の利用法について体系的に実習を行う。

参考文献

- 景井充、山本愛、田中翔「産業社会学部学生参画型 FD 懇談会—ここに全構成員自治あり—」『立命館大学教育開発支援センターニュースレター ITLNews』No.28、2013 年、6 頁。
- 木野茂『大学を変える、学生が変わる—学生 FD ガイドブック』ナカニシヤ出版、2012 年。
- Nygaard, C., Brand, S., Bartholomew, P. and Millard, L., *Student Engagement: Identity, Motivation and Community*, Faringdon, Oxfordshire, UK: Libri Publishing, 2013

The Innovation of University by Student Engagement: The Case Study of Sansha FD Discussion

YAMAMOTO Ai (Administrative Staff, College of Social Sciences, Ritsumeikan University)

Abstract

This paper reports the practice of “Sansha FD discussion” which the FD committee of the College of Social Sciences has furnished since 2011. “Sansha FD discussion” is the gathering of students, teachers and administrators, which especially encourages students’ engagement. I will elucidate the significance of “discussion with students” and its effect on faculty development. Also I will mention a new idea about the roles of “teachers, students, and administrators”, and its new relations among them which go beyond the ordinary structure, that is, “someone who teaches, someone who is taught, and someone who does office work”. The Sansha FD discussion has given us an expectation that the teamwork by the parties concerned in the field of education will make further innovations in creating a new university.

Keywords

Sansha FD discussion, peer support, FD (Faculty Development), SD (Staff Development), SD (Student Development), an actor, a producer

